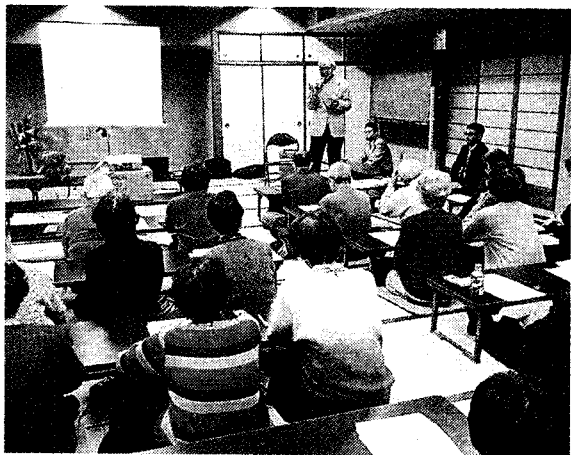


災害時の弱者支援 必要

北区で区民が研修会

京都市北区の災害ボランティアアセンターがこのほど、同区の鳳徳会館で災害に強いまちづくりをテーマにした研修会を開いた。視覚に障害のある男性が、災害が発生した際の不安などを語り、参加した区民約五十人が熱心に耳を傾けた。

地元の鳳徳学区では昨年度から、災害時に安否確認などで配慮が必要な人への支援体制と地域福祉のありかたをテーマに、災害時の障害者への対応について研修を重ねてきた。同学区が培ってきたノウハウを北区



障害者や高齢者など、災害時に配慮が必要な人への対応などについて話し合う参加者たち（京都市北区）

「地域の福祉力向上を」

民で共有しようと、北区社会福祉協議会などで行く同センターが企画した。

研修会では、市福祉ボランティアアセンター職員が、支援活動で訪れた台風や地震の被災地の実情を紹介。普段から地域の福祉力を高めておく重要性を訴えた。

その後、視覚に障害のある城野時一さん（67）が、災害時の不安を語った。城野さんは、災害があっても素早く移動できない▽避難所で情報提供が文字では読めない▽聴覚障害者は、放送が分からない▽車いすでは二、三段でも段差のある体育館では出入りが困難—といった視覚障害に伴う懸念を伝え、「家庭でも一度、話し合ってみてください」と呼びかけた。

同学区社協の黒田清太郎会長（71）は「災害時に配慮や支援が必要な人たちについて、想像以上に知らないことが多かった。今後、要支援者の地図作りなどに取り組みたい」と話していた。

避難に時間かかるなど 視覚障害者が不安語る

（高橋道長）